玉里文庫本『古筆源氏物語』「花宴」巻の翻刻と考察

武藤　那賀子

はじめに

鹿児島大学附属図書館が所蔵する玉里文庫本の古筆源氏物語[1]は、鎌倉時代から南北朝時代に書写されたものと考えられている、全一五帖（「空蟬」「花宴」「賢木」「須磨」「関屋」「絵合」「松風」「玉鬘」「初音」「野分」「藤裏葉」「若菜下」「夕霧」「匂宮」「紅梅」）の取り合わせ本である。当該本については、徳光澄雄が書誌調査および本文の傾向を調査した[2]。また、伊藤鉄也が画像をサイトに掲載している[3]。しかし、徳光論の書誌に疑問点があったため、拙稿二本において書誌情報を再調査した[4]。

また、前稿[5]では、「尾州家本に近い別本の一種[6]」、「陽明家本と桃園文庫本との中間[7]」と言われた「空蟬」巻を取り上げた。陽明文庫本と「同一祖本を有する[8]」とされた「空蟬」巻であるが、陽明文庫本と玉里文庫本の脱文箇所を比較した結果、同一祖本ではない可能性があると指摘した。

本論では、「花宴」巻を取り上げ、翻刻するとともに考察を行なう。当該本の詳細な書誌情報は拙稿に詳しいが[9]、その中で重要と思われる書誌情報の一部を改めて掲げる。

【装　訂】綴葉装　一帖

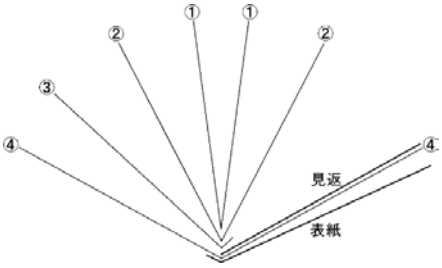
【表　紙】青碧の地に木蘭色で梅と葡萄の円紋散らし模様を織り出した布表紙。

【見　返】鳥の子紙に銀切箔散らし。

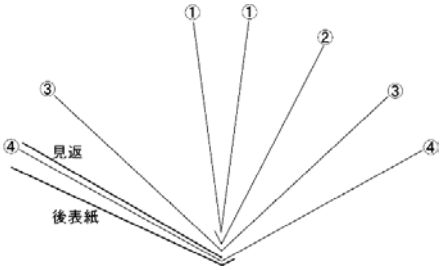
【本文料紙】鳥の子紙。

【寸　法】縦一六・四cm×横一五・四cm

【丁　数】全三折。最初と最後の丁はそれぞれ表紙と後表紙の中に挟まれている。第一折は三紙と一丁からなる（図一）。第二折は四紙からなる。第三折は三紙と一丁からなる（図二）。後遊紙二丁。このため、全二〇丁、墨付一八丁となる。



（図一）第一折を地から見た図



（図二）第三折を地から見た図

【その他】後遊紙一丁ウラと後遊二丁オモテには、それぞれ、五行分ほど、墨書の移りが見られる。この二丁の間には、第十七丁と対になるはずの紙があった痕跡があることから、この紙に何かしらの文言があったものが、切り取られたと考えられる。

キーワード：書誌学、玉里文庫本、古筆源氏物語、花宴、河内本系本文

＊本学国際文化学部准教授

翻刻と考察

【凡例】

一．改行箇所や和歌の書式は原本のままとし、丁数とその表裏、行数を付記した。なお、丁数の下の括弧内には画像のコマ数および画面の左右の表記、および『源氏物語大成』[10]のページ数・行数を示した。

一．原本に用いられている変体仮名は、すべて現行の平仮名に統一した。ただし、原本の平仮名中に片仮名を混用した箇所は、片仮名を平仮名に改めた。

一．ミセケチは、現状では文字に二本線を引いている。このため翻刻では、ミセケチを、取り消し線で示した。

一．傍記は、該当する文字の横にそのまま示した。

一．補入記号のない補入は〻〻で示し、補入記号のある補入は〈　〉で示した。

一．各丁の翻刻の後に載せた異同は、当該本と一致するものがある場合にはその諸本を漢字一字で示した。このとき、定家本系、河内本系、別本全てが一致する場合には、それぞれ定 河 別とのみ示した[11]。定家本系、河内本系の中の何本かが一致する場合には、それぞれの系統の文字を示した後に一致する諸本を漢字一字で示す。なお、別本に属する諸本はこの限りではない。また、一致するものがない場合には「ナシ」とし、近い本文があった場合、その本文を［参考］に掲げた。

一丁オモテ（画六五三左／大二六九）

1　きさらきのはつかあまり南殿
2　のさくらの宴せさせたまふき
3　さき春宮の①女御の御つほねひた
4　りみきにしてまうのほり給
5　弘徽殿の女御②は中宮のかくてお
6　はするをおりふしことにやすから
7　すおほせとものみにはえすくし
8　給はてまいり給③へり日いとよく
9　はれてそらのけしきとりの聲も
10　こゝちよけなるに④上達部みこ

①　ナシ。［参考］諸本ナシ
②　河
③　河
④　河

三行目「きさき春宮の女御の御つほねひたりみきにしてまうのほり給」の「春宮の女御」は、玉里文庫本独自本文である。諸注釈では「玉座（帝の御席）の左（東）側に東宮を、右（西）側に中宮を配した[11]。」となっているが、これも根拠が必要であろう。素直に読むと、帝の左側に后、右側に春宮となるはずである。それをこの配置にしたのは、東側が東宮の御座所であり、また、左の方が位が高いからであろう。とするならば、玉里文庫本は、この配置に疑問を持って「春宮の女御」としたと考えられる。

「春宮の女御」には、東宮の母女御の意味と東宮妃の二つの意味があるが、『源氏物語』に出てくる「春宮の女御[12]」は、いずれも母女御の意味で使用している[13]。

なお、「春宮の女御」とあるのに、後には「東宮」とあるのは、「春宮の女御」で一つの言葉という認識だからであろう。

一丁ウラ（画六五四右／大二六九）

1　たちよりはしめて①そのみち
2　みな探韻たまはりてふみつく
3　りたまふ宰相の中将はるといふ

4　もし給はれりとのたまふこゑさへ
5　れいの人にことなりつきに頭の
6　中将ひとのめうつし②いかゝと
7　たゝならすおほゆへか③むめれ④と心
8　つかひしていとめやすくもて
9　しつめ⑤たるよういこはつかひ
10　なともの〳〵しく⑥なへての人には

①　ナシ　［参考］諸本「そのみちのは」
②　河宮尾大
［参考］定「も」、河平「もいかゝと」、別「いかゝ」
③　ナシ。ただし、「ん」の表記が定穂徹正[14]にはある。
④　ナシ　［参考］定「と」、河「は心つかひして」、別「は」。
⑤　河
⑥　河

七行目から九行目の「心つかひしていとめやすくもてしつめたるよういこはつかひなともの〳〵しくなへての人にはすくれたり」は河内本系本文と同じである。定家本系および別本では「て」となっているこの箇所だが、河内本系本文を基に書かれた古注釈には指摘がない。「心つかひ」も「ようい」も似たことを述べているように見えるが、それだけ頭中将が神経の行き届いた人物であるという描き方がされているともいえる。さらに、それでもなお、頭中将が勝っているのは「なべての人」であって源氏ではないため、源氏の超人性が浮かび上がるといえる。なお、「もてしつめたる」は「ようい」と「こはつかひ（なと）」の双方にかかっていくと考えられる。

二丁オモテ（画六五四左／大二六九）

1　すくれたり・さての人〳〵はみな
2　をくしかちにはなしろめる
3　おほかり地下の①〈文〉人なとはまして
4　みかと②東宮のさえかしこくかゝる
5　かたにやむことなき人おほくもの
6　したまふ③ころなるにはる〳〵と
7　くもりなき④御まへのにはにたち
8　いつる⑤こゝちともはしたなくて
9　やすき⑥ほとのことなれと⑦いとくる
10　しけなりとしをいたるはかせとも

①　［参考］定・別「人」、河「地下の文人なと」
②　ナシ
［参考］定「春宮の御さえかしこくすくれておはします」
河「東宮もさえかしこく」
③　河
［参考］定大横陽池長肖別「ころなるにはつかしく」定三「ころなるにはつかしくて」
④　河　［参考］定別ナシ
⑤　河　［参考］定別「ほと」
⑥　定長三（ただしミセケチ）、河、別　［参考］その他諸本「やすき事」
⑦　河　［参考］定別ナシ

二丁ウラ（画六五五右／大二六九〜二七〇）

1　の①なりあしく②やつれたれとれい
2　のなれたるさまとももあはれにさ
3　ま〳〵③御覧せらるゝなむをかし
4　かりける④かくともはさらにもいはす
5　⑤かきりなくとゝのへさせたま

6　へりやう〳〵いりひになる⑥ほとに春
7　のうくひすさへつるといふまひい
8　とおもしろくみゆるに源しの
9　⑦きみの御もみちのかのをりお
10　ほしいてられて春宮かさし給

①　河宮尾大　［参考］定別「なりあやしく」河平「あやしく」
②　河尾平大
［参考］河宮「やつれたれとれいのなれたるさまとももものあはれに」
　定別「やつれてれいなれたるもあはれに」
③　河　［参考］定別「御らんする」
④　河　［参考］その他諸本「かくともなとは」
⑤　河　［参考］定別ナシ
⑥　河宮、定三「ほと止」　［参考］その他諸本「ほと」
⑦　河　［参考］定別ナシ

三丁オモテ（画六五五左／大二七〇）

1　はせてせちに①せめさせ給にのか
2　れかたくてたちてのとかにそて
3　かへすところを②ひとかへりけしき
4　はかりまひたまへるににるへき
5　物③もなくみゆ左のをとゝうらめ
6　しさもわすれてなみたをとし
7　たまふ④つきに頭の中将いつらを
8　そしとあれは柳花苑といふまひを
9　これはいますこしすくしてかゝる
10　こともやとこゝろつかひやし⑤たり

①　河宮
［参考］別「せめ給はする」、その他諸本「せめのたまはするに」
②　河　［参考］定別「ひとをれ」
③　ナシ　［参考］諸本ナシ
④　河　［参考］定別ナシ
⑤　河　［参考］定別ナシ

三丁ウラ（画六五六右／大二七〇）

1　けむ①いとをもしろくまひたまへれ
2　はおほむそ給はりてめつらしきれ
3　いに人おもへり②さらぬかむたちめ
4　もあまたみたれまいたまへとよに
5　③いりぬれはことにけちめもみえす
6　④詩文ともかうするにも源氏の君
7　の⑤御はかうしもえよみやらすく
8　ことにすしの、しるはかせとものの
9　⑥おもへるけしきなといといみし
10　うやうのをりにたゝこのきみを

①　河宮尾大
［参考］河平「いとおもしろく舞給へれは御そ給はせてめつらしきれゐに」
　その他諸本「いとおもしろけれは御そ給はりていとめつらしき事に」
②　河　［参考］その他諸本「かむたちめみなみたれて」
③　河　［参考］定長「いりて」その他諸本「入ては」
④　ナシ　［参考］定「ふみなと」河「しとも」
⑤　河宮　［参考］定横陽「をは」別「御詩をは」その他諸本「御をは」
⑥　ナシ

四

［参考］河宮「おもへる気色なといといみしくかうやうのおりにもたゝ」
河尾大「おもへるけしきなといといみしかうやうのおりにもたゝ」
その他諸本「心にもいみしうおもへりかうやうのおりにもまつ」

四丁オモテ（画六五六左／大二七〇）

1 ひかりにしたまへれは①いかてかは
2 みかとのをろかに②思きこゑ給はむ
3 中宮③は御めのとまるにつけて④も
4 東宮の女御のあなかちにくみ
5 給覧もあやしう⑤わかゝくおもふも
6 ⑥いかなれはとこゝろうくそおもほし
7 かへされける
8 おほかたにはなのすかたをみま
9 しかは露も心のをかれましやは
10 ⑦と御こゝろのうちなりけむこと

① 河［参考］その他諸本「みかともいかてか」
② 河［参考］その他諸本「おほされん」
③ 河［参考］その他諸本ナシ
④ 河別［参考］定ナシ
⑤ ナシ［参考］その他諸本「わかかう」
⑥ ナシ
［参考］定「心うしとそみつからおほしかへされける」
河宮「いかなれはと心うくそおほしかへされける」
河尾大「いかなれはと心うくそかへさひおもほしける」
⑦ 河［参考］その他諸本ナシ

四丁ウラ（画六五七右／大二七〇～二七一）

1 いかてもりにけむよ①いたくふけ
2 てなむことはてけるかむたちへ
3 をの〳〵あかれ②東宮中宮③かへら
4 せ給なとしぬれはのとやかになり
5 ぬるに月いと④あかくさしいて、
6 ⑤をもしろきを源氏の君ゑひこ、
7 ちにみすくしかたくおほえ給け
8 れはうゑの人〳〵もうちやすみて
9 かやうにおもひかけぬほとにもし
10 さりぬへき⑥ひまもやとふちつほ

① 定肖［参考］その他諸本「いたう」
② 河尾大［参考］河宮「東宮中宮なと」その他諸本「后春宮」
③ 河尾大［参考］その他諸本「かへらせ給ひぬれは」
④ 定陽肖［参考］定横「あかゟ」その他諸本「あかう」
⑤ 河
⑥ 河
［参考］定長「ひまやある」三「ひま〈も〉やある」その他諸本「ひまもやあると」

五丁オモテ（画六五七左／大二七一）

1 わたりを①わりなくしのひてう
2 かゝい②ありき給へとかたらふへき
3 とくちもさしてけれはうちなけ
4 きてなをあらしに弘徽殿のほそ
5 殿にたちより給へれは三のくち
6 あきたり女御はうゑの御つほねにや

7 かてまうのほりたまふにけれは
8 人すくなゝる③けしきなりをくの
9 くるゝともあきて人をともせす
10 かやうにて④よのひとはあやまちも

① ナシ　［参考］定大「はりなふ」その他諸本「わりなふ」
② 河　［参考］定「ありけと」別「あるけと」
③ 河　［参考］その他諸本「けはひ」
④ 河　［参考］その他諸本「世中のあやまちは」

五丁ウラ（画六五八右／大二七一）

1 するそかしと思てやをらのほり
2 てのそき①給へは人はみな②ねたる
3 なるへしいと③わかく④をかしき
4 こゑのなへての人とはきこえぬ
5 ⑤にておほろ月よにはにるものそ
6 なきとうちすしてこなたさま
7 にはくるものかいとうれしくて
8 ふとそてを⑥とらへつ⑦女おもひか
9 けすうとましとおもひてあな
10 をそろしこはたそと⑧のた［ま］へは

① 河
② 河尾大　［参考］その他諸本「ねたるへし」
③ ナシ　［参考］諸本「わかう」
④ 河
⑤ 河　［参考］その他諸本ナシ
⑥ 定長河別　［参考］定三「とらへ給」その他諸本「とらへ給」
⑦ 河
［参考］定「女おそろしと思へるけしきにてあなむくつけ」
別「おそろしと思へるけしきにてあなむくつけ」
⑧ 河　［参考］定別「の給へと」

六丁オモテ（画六五八左／大二七一～二七二）

1 ①なにかはおそろしきとて
2 ふかきよのあはれをしるもいる
3 月のおほろけならぬちきりとそ
4 おもふ②といふまゝにやをらいたき
5 をろしてとはおしたてつ③あ
6 さましとあきれたる④けはひいと
7 らうたけになつかしわなゝく〳〵
8 こゝに人とのたまへ⑤はまろはみな
9 人に⑥ゆるされたる身なれはめし
10 よせたりともなてうことかあらん

① ナシ　［参考］定別「なにかうとましき」河「なにかおそろしき」
② 河
③ 河
④ 河　［参考］その他諸本「さまいとなつかしうおかしけなり」
⑤ 河別
⑥ 河　［参考］その他諸本「ゆるされたれは」

六丁ウラ（画六五九右／大二七二）

1 たゝしのひてこそとのたまふこ
2 ゑに①そこのきみなりけりと
3 ②きくにやすこしなくさみけむわ

六

4 ひしと③おもふものからなさけなく
5 ④こは〳〵しとはみえしとおもへり
6 ⑤ゑいの心ちやれいならさりけむゆる
7 さむことはくちをしきにをむなも
8 ⑥わかくたをやきてつよきこゝろも
9 ⑦えしらぬなるへしらうたしと
10 みたまふにほとなく⑧あけゆくけ

① 河 ［参考］その他諸本ナシ
② ナシ
［参考］定別「きゝさためていさゝかなくさめけり」
河宮「きゝさためていさゝかなくさみけん」
河尾平大「きくにすこしなくさみける」
③ 河
④ 河宮 ［参考］定河尾平別「こわ〳〵しうは」河大「こをしうは」
⑤ ナシ ［参考］定河宮尾平別「ゑい心ち」河大「ゑい心」
⑥ ナシ ［参考］諸本「わかう」
⑦ 河 ［参考］その他諸本ナシ
⑧ 河 ［参考］その他諸本「あけゆけは」

七丁オモテ（画六五九左／大二七二）

1 はひなれはいと心あはたゝし女は
2 ましてさま〳〵に思みたれたるけ
3 しき①いみしけれはなをなのりし
4 給へ②いかてかきこゆへき③さりとも
5 かくてやみなむとは④よにおほさ
6 しなとのたまへは
7 うきみよにやかてきえなは
8 たつねてもくさのはらをはとは
9 しとやおもふといふさま⑤いとな
10 まめかしうまたきかまほしき

① 河 ［参考］その他諸本「なり」
② 河尾平大 ［参考］定「いかて」別「ことといかてか」
③ 河 ［参考］その他諸本「かうて」
④ 河 ［参考］定「さりともおほされしと」別「さりともおほさしと」
⑤ 河尾平大
［参考］定別「えむになまめきたり」
河宮「いとなつかしう又きかまほしきさましたり」

七丁ウラ（画六六〇右／大二七二）

1 さましたりことはりやきこゑ
2 たかへたるもしかなとて
3 いつれそと露のやとりをわかむ
4 まにこさゝかはらに風もこそ
5 ふけわつらはしくおほすこと
6 ①なくはなにゝかはつゝまむもし
7 すかい給かとも②えいひあえす人〳〵
8 をきさはきうゑの御つほねに
9 まいりちかふ③けはひともしけく
10 まよへは④わりなくてあふきはか

① ナシ ［参考］定別「ならすはなにか」河「なくはなにかは」
② 河 ［参考］その他諸本ナシ
③ 河
④ 河

［参考］定大「いとはりなくて」定横陽池長肖三「いとわりなくて」別「いとわりなくて」

八丁オモテ（画六六〇左／大二七二～二七三）

1 りをしるしに①とやとりかえて
2 いてたまひぬきりつほに②も人〳〵
3 おほくさふらひてをとろきたる
4 もあれは③さもたゆみなき御し
5 のひありきかなとつきしろひ
6 つゝそらねをそ④するいりてふし
7 たまへれと⑤ねもいられ給はす
8 をかしかりつる人の⑥けはひかな
9 女御の⑦御をとうとゝもにこそは
10 ありつらめまたよになれぬは

① 河宮平　［参考］河尾大「とにや」その他諸本ナシ
② 河
③ 河
④ 河
⑤ 河　［参考］定「ねいられす」別「ねられす」
⑥ 河　［参考］その他諸本「さま」
⑦ 河宮尾大
［参考］定横長「おとうとたちにこそはあらめ」
定三「〈御〉おとうとたちにこそはあらめ」
定大陽池肖「御おとうとたちにこそはあらめ」
河平「御おとうとゝもにこそありつらめ」
別「御おとゝたちにこそはあらめ」

八丁ウラ（画六六一右／大二七三）

1 五六の①ほとならんかしそちの宮
2 のきたのかた頭の中将のすさめぬ
3 四のきみなとこそよしとき、し②は
4 ③それならましかはなか〳〵います
5 こし④おかしくをほへなましと六
6 ⑤のきみはとう宮にたてまつらん
7 と⑥ゝりわき心さしてかしつき給
8 なるを⑦いとをしくも⑧あへにかな
9 と⑨わつらはしくたつねむほとも⑩ま
10 きらはかし給なとをもひみたれ

① 河
② ナシ　［参考］諸本「か」
③ 河　［参考］定「なか〳〵それならましかは」
④ ナシ
「参考」定「おかしからまし」河宮尾平「をかしうおほえなまし」河大「おこましくおほへなまし」
⑤ 河　［参考］その他諸本ナシ
⑥ 河
⑦ ナシ　［参考］諸本「いとをしう」
⑧ ナシ　［参考］定別「あるへいかな」河「あへいかなと」
⑨ ナシ　［参考］諸本「わつらはしう」
⑩ ナシ
［参考］定「まきらはしさてたえなむとはおもはぬけしきなりつるを」
河「まきらはしくなとおもひみたれ給さすかにたえてやみなん事はつらかるへくおもへりつる気色なから」
別「まきらはしてさてたえなむとはおもはぬけしきなりつるを」

八

九丁オモテ（画六六一左／大二七三）

1　たまふさすかにたえてやみ
2　なむことはつらかるへくおもへり
3　つるけしきなからいかなれはこ
4　とかよはすへき①たよりをはおしへ
5　すなりぬらんなとよろつに②おほ
6　しあつかはるゝるも心のとまる③な
7　めりかし④かやうなるにつけても
8　まつかのわたりの⑤御ありさまの⑥こ
9　よなくをくまりたるはやと⑦ありか
10　たくおもひくらへられ給そのひは

①　河
②　ナシ　［参考］定別「おもふも」河「おほしあつかはるゝも」
③　河宮　［参考］その他諸本「なるへし」
④　ナシ
［参考］定三「か〈う〉やるなるに」その他諸本「かうやうなるに」
⑤　河
⑥　ナシ　［参考］諸本「こよなう」
⑦　ナシ　［参考］諸本「ありかたふ」

五行目から六行目の「おほしあつかはるゝるも」の箇所は、読解ができず不審である。この箇所は、定家本系および別本では「おもふも」、河内本系では「おほしあつかはるゝも」となっており、本来は河内本系の本文であった可能性が高いと考えられる。

九丁ウラ（画六六二右／二七三）

1　後宴のことありてまきれくらし
2　①たまひつきのふのことよりも②まさ
3　りてなまめかしくおもしろし
4　ふちつほはあか月にまうのほり
5　給ひにけりかの③ありあけの人
6　いてやしぬらんとこゝろもそらに
7　ておもひいたらぬくまなきよし
8　きよこれみつをつけてうかゝはせ
9　④たまふ御前より⑤をりたまへるに
10　たゝいま⑥なむきたのちむ⑦にかく

①　河　［参考］定別「たまひつさうのことつかうまつり給」
②　ナシ　［参考］河「まさりてなまめかしう」定別「なまめかしう」
③　河
④　河　［参考］定別「給けれは」
⑤　河　［参考］定別「まかて給ひけるほとに」
⑥　河宮別　［参考］河尾平大「ならむ」定ナシ
⑦　ナシ
［参考］定「よりかねてよりかくれたちて侍つる」
河「にかくろへつゝたてゝ侍つる」
別「よりかくれたちて侍つる」

一〇丁オモテ（画六六二左／大二七三～二七四）

1　ろへつゝたてゝはむへりけるくる
2　まとも①いてはんへりつるや御かた
3　かたのさと人②ともならんとみはへ
4　るなかに四位の少将③左中弁なとい
5　そきいてて④をくりかしつき侍つる
6　こそこきてむの御あかれ⑤にはむ

7　へめりつれけしうはあらぬけはひ
8　ともしるくてくるまみつはかり⑥は
9　はむへりつときこゆるにもむねう
10　ちつふれ⑦ていかにして⑧かはいつれと

①　河　［参考］定別「まかりいつる」
②　河
③　定肖河　［参考］その他諸本「右中弁」
④　ナシ
［参考］定大別「をくりし侍へるや」
定横「をくりしはへつるや」
定陽池長肖三「をくりし侍つるや」
河宮「をくりかしつき侍りつるにこそ」
河尾平大「をくりしかしつきはへりつるにこそ」
⑤　河尾平大　［参考］定「ならんとみ給へつる」河宮「に侍つれ」
⑥　ナシ　［参考］諸本ナシ
⑦　河別　［参考］定ナシ
⑧　河宮　［参考］定ナシ河尾平大「か」

一〇丁ウラ（画六六三右／大二七四）

1　①しるへからんを②おとゝきゝつけ給
2　ては③こと〳〵しく④もてなされんも
3　いかにそや⑤人のありさま⑥なとよく
4　みさためぬほとはわつらはしかる
5　へしさりとて⑦かくなからすきなん
6　はたくちをしかるへけれはいかに
7　せましとおほしわつらひてつく〳〵と
8　なかめふし給へりひめきみいか
9　に⑧つれ〳〵におほえ給らん⑨ひころに
10　なりぬれはれいのくんしやし給

①　河
②　ナシ　［参考］定「ちゝおとゝなときゝて」河「ちゝおとゝきゝつけ給ては」別「ちゝおとゝのなときゝて」
③　ナシ　［参考］諸本「こと〳〵しう」
④　定横陽長河別
［参考］定三「もてなされんも」その他諸本「もてなさんも」
⑤　河　［参考］その他諸本ナシ
⑥　河
⑦　河尾平大
［参考］定別「しらてあらんはた」河宮「かくなからすきなんは」
⑧　河
⑨　河宮尾平
［参考］定別「ひころになれはくしてやあらむとらうたく」河大「と心くるしう」

一一丁オモテ（画六六三左／大二七四）

1　らんと心くるしうおほしやるかの
2　しるしのあふきはさくら①のみえ
3　かさねにてこきかたにかすめる
4　月をかきて水にうつしたる心
5　はへ②なとめなれたることなれとゆゑ
6　③なつかしく④もてなしたりくさの
7　はらをはといひしさまのみ⑤御心
8　に⑥かゝりておほえ給へは
9　世にしらぬこゝちこそすれあり

一〇

10　あけの月のゆくゑをそらにまかへて

①　定横長肖三河別
［参考］定池「さくら〈のみへ〉かさね」定大陽ナシ
②　河
③　ナシ　［参考］諸本「なつかしう」
④　河　［参考］定大横陽池長別「もてならしたり」定肖「もてならしたる」三「もてならしたり」
⑤　ナシ　［参考］諸本「心」
⑥　河尾平大
［参考］河宮「かゝりておほえさせ給へは」定別「かゝり給へは」

一一丁ウラ（画六六四右／大二七四～二七五）

1　と①かきつけてをき給へり②まかて給
2　におほいとのにもひさしうなりに
3　③けりとおほせと④まつわかきみのこゝろ
4　くるしさこしらへおかむとおほし
5　て⑤二条の院におはしぬみるまゝに
6　⑥うつくしうのみをいなりてあ
7　いきやうつきらう〳〵しき⑦御心
8　はへいとことなりあかぬところ⑧な
9　くわか御心のまゝにをしへな
10　さむとおほすにかなひぬへし

①　河尾平大別　［参考］定「かきつけ給ひて」河宮「かゝせ給て」
②　河　［参考］その他諸本ナシ
③　河
④　河　［参考］定別「わか君も心くるしけれはこしらへむと」
⑤　河尾平大　［参考］その他諸本「二条院へ」
⑥　河　［参考］定別「いとうつくしけに」
⑦　河　［参考］定「心はへ」別「心は」
⑧ナシ

一二丁オモテ（画六六四左／大二七五）

1　おとこの御をしへなれは①もし人
2　なれたるところやましらむとおもふ
3　こそうしろめたけれひころの御
4　ものかたり②ともきこへおほむこと
5　なと日ひとひをしへくらし給てよ
6　るになれはいて給を③れいのくち
7　をしとおほしたれといまはいと④よく
8　ならはされてわりなくは⑤したい給
9　はすおほい殿にはれいのふともたい
10　めむし給はすつれ〳〵と⑥うちなか

①　ナシ　［参考］諸本「すこし」
②　河　［参考］定別「御ことなとをしへくらして」
③　河
④　定肖
⑤　ナシ　［参考］定「したひまつはさす」河「したひきこえ給はす」別「したひまとはさす」
⑥　河

一二丁ウラ（画六六五右／大二七五）

1　めてよろつおほしめくらされて
2　①しやうのことを②まさくりつゝやはら

3 かにぬるよはなくてとうたひ③すさ
4 ひつゝをはするにをとゝわたり④た
5 まへり一ひの⑤ことゝものけうありし
6 こと⑥なときこへ給こゝらのよはひ
7 にて明王の御よ四代⑦にあひはむ
8 へりぬれとこのたひのやうにふみ
9 ともきやうさくにまひ⑧かくとゝの
10 ほりてよはひのふることなむ⑨みえ

① ナシ　［参考］定別「さうの御こと」河宮「さうの御琴を」河尾平大「さうのことを」
② 河
③ 河　［参考］定「うたひ給」別「うたひたまふを」
④ 河
⑤ 河
⑥ 河　［参考］定ナシ　別「ことゝも」
⑦ 河
⑧ 河　［参考］定別「かくものゝねとも」
⑨ ナシ　［参考］定別「侍らさりつる」河「み侍らさりつる」

一三丁オモテ（画六六五左／大二七五）

1 侍さりつるみち〳〵のもの、上すとも
2 ①おほかりける②ころをいなるを③くは
3 しく④きこしめしいれてとゝのへさ
4 せ⑤給へりけるとなんみたまへし
5 おきなもほと〳〵まひいてぬへき
6 心地なむし侍しときこえ給へは
7 ことに⑥わさととゝのへ⑦いとなむこ
8 とも侍さりきたゝおほやけ事
9 ⑧かたむものゝしともをこゝかしこ
10 に⑨かしこくたつねいてゝ侍しなり

① 河
② 河尾平大　［参考］河宮「ころをひなりけるを」定別「ころをひ」
③ ナシ
④ 河
⑤ 河
⑥ 河
⑦ 河
⑧ 河　［参考］定「にそしうなる」別「にことなる」
⑨ 河尾平大　［参考］河宮「たつねいてゝ」定「たつね」別「たつねて」

一三丁ウラ（画六六六右／大二七五～二七六）

1 ①一ひのことよろつのことよりは柳花
2 苑②なむまことに後代のれいと③なり
3 ぬへきことゝみはへりしをまして
4 ④さかゆるはるにたちいてさせ⑤た
5 まへらましかは⑥いみしきよのめむ
6 ほくに侍ましなときこえ給⑦ほと
7 に⑧中将弁なとまいりあひ⑨たまへ
8 れはさま〳〵の御ものかたりとも
9 きこえ給つゝとり〳〵にものゝね
10 ともしらへあはせてあそひ給

① 河尾平大
［参考］河宮「一日のことよろつのことよりも」定別「よろつのことよ

りは」

② 定長河別

③ 河

④ 河 ［参考］定「さかゆく」別「さかふる」

⑤ 定横陽池長肖三河別 ［参考］定大「給へ」

⑥ 河宮尾平

［参考］定別「世のめんぼくにや」河大「いみしきよゝのめいほくに」

⑦ 河

⑧ 河 ［参考］定「弁中将」別「とう中将」

⑨ 河 ［参考］定別「てかうらむにせなかをしつゝ」

一四オモテ（画六六六左／大二七六）

1 いとをもしろしかのありあけの君
2 ははかなかりし①ゆめのゝちもの
3 いとなけかしくてなかめのみし給
4 ②東宮には四月はかりと③おほしさため
5 たるをみたまふにもいと④わりなく
6 ⑤おもひみたれ給へり⑥おとこ君もわ
7 するゝときはなしたつねたまはん⑦と
8 ⑧あとはかなきにはあらねといつれ
9 ともしらてことにゆるし給はぬ
10 あたりにかゝつらはんも人⑨わろき

① 河平

［参考］河宮尾大「夢ののち物いとなけかしくてなかめをのみし給」定「夢をおほしいて、いとものなけかしうなかめ給ふ」

② 定別 ［参考］河「春宮に」

③ ナシ

［参考］定別「おほしさためたれは」河「さためたるをみたまふにも」

④ ナシ

⑤ 河 ［参考］定別「おほしみたれたるを」

⑥ 河 ［参考］定別「おとこも」

⑦ ナシ ［参考］諸本「に」

⑧ 河

⑨ 河 ［参考］定別「人わるくおもひわつらひ給ふに」

一四丁ウラ（画六六七右／大二七六）

1 心地したまへはとかくおほしや
2 すらふなりけり①三月廿よ日に
3 ②右のおほい殿にゆみのけちにかむ
4 たちへ③殿上人おほくつとへ給て
5 やかて④ふちのはな（の）えむしたまひ
6 けり花さかりはすきに⑤たれとほか
7 のちりなむとやをしへられたりけ
8 むをくれて⑥さきたるさくら⑦ふた
9 きはかりいと⑧をもしろしあたら
10 しうつくり⑨たるとのをみやた

① 河尾 ［参考］定河宮大別「やよひの廿余日」河平「三月二十よひに」

② 河

③ 河 ［参考］定別「みこたち」

④ ナシ

［参考］定大池肖「ふちの宴し給ふ」定横長「ふちのはなのえんし給ふ」陽「ふちのはなえんし給ふ」三「ふちの花のえん」河「ふちのはなのえんし給けり」別「ふちのはなのえんし給ふ」

一三

⑤ 河尾大　［参考］定河宮別「たるを」河平「けれと」
⑥ 河
⑦ 河尾平大　［参考］定別「ふた木そ」河宮「木はかり」
⑧ 河
⑨ 河

一五丁オモテ（画六六七左／大二七六）

1 ちの①御もきにみかきたてられた
2 るまゝにいとめてたしなにこと
3 もはな〳〵とものし給②ところやう
4 にていと③いまめかしくもてなし
5 ④たへり⑤源氏の君はうちにて御た
6 いめむのついてにきこへたまひ
7 しかとおはせねは⑥御このくら人（四ゐのとも）の
8 少将をたてまつり給
9 わかやとのはなしなへてのいろなら
10 はなにかはさらに君をまたまし

① 河
② 河尾平大
［参考］定別「殿のやうにてなに事も」河宮「ところさまにていと」
③ ナシ
④ ナシ　［参考］諸本「給へり」
⑤ 河
［参考］定大横陽池肖「源氏の君にも一日」定長別「源氏のきみには一日」
定三「けんしのきみには（も）一日」
⑥ ナシ
［参考］定別「くちおしうもの、はえなしとおほして御子の四位の少将を」
河宮「くちおしうもの、はえなしとおほして御子のくらうとの少将」
河尾平大「くちおしうもの、はえなしとおほして御子のくら人の少将を」

一四

一五丁ウラ（画六六八右／大二七六～二七七）

1 うちに①さふらひ給ほとなれはやかて
2 かくなむとそうし給したりかほなり
3 やとわらはせ給てわさとあめるを
4 ②はやものせよかしをんなみこた
5 ち③なとをひいつるところ④なめれは
6 ⑤なへてにはおもふましきをとのた
7 まはすおほむよそひなと⑥心ことに
8 ひきつくろひて⑦くるゝほとにいた
9 うまたれてそわたり⑧給へるさくら
10 のからのきの御なをしえひそめの

① 河
② ナシ　［参考］諸本「はやう」
③ 河
④ 河
⑤ 河　［参考］定別「なへてのさまには思ましきをなと」
⑥ 河　［参考］定別「ひきつくろひ給て」
⑦ 河　［参考］定別「いたうくるゝほと」
⑧ 河　［参考］定別「給」

一六丁オモテ（画六六八左／大二七七）

1 したかさねしりいとなかくひきて

2 みな人はうゑのきぬなるにあさ
3 れたるおほきみすかたのなまめ
4 きたるにていつかれいり給へる
5 ①さまけにそめてたきはなのにほ
6 ひもけをされてなか〳〵ことさま
7 しに②そみゆるおほむあそひなと
8 いと③おもしろしよすこしふけゆく
9 ほとに源氏のきみ④いたうゑいなや
10 めるさまに⑤もてなしてまきれたち

① 河 ［参考］定別「御さまけにいとことなり」
② 河 ［参考］定別「なむ」
③ 河 ［参考］定別「おもしろうし給て」
④ 定陽長肖 ［参考］その他諸本「いたく」
⑤ 河 ［参考］定別「もてなし給て」

一六丁ウラ（画六六九右／大二七七）

1 給ひぬしむてん①には女一の宮②女三の
2 宮おはしますひむかしのとくち
3 にをはしてよりゐ給へりふち
4 はこなたのつまにあたりてあれは
5 みかうしともあけわたして人〳〵
6 ③いてゐたるなりけりそてくち
7 ④とものこほれいてたるさまなとた
8 うかのをり⑤思いてられてことさら
9 めきもていてたるをふさはし
10 からすとまつ⑥ふちつほわたりをも

① 河
② 河別
③ 河尾平大 ［参考］河宮「いてたるなりけり」定別「いてゐたり」
④ 河 ［参考］定別「なと」
⑤ 河
⑥ ナシ
［参考］定河尾平大別「ふちつほわたりおほし」
河宮「藤つほわたりをもおほし」

一六丁ウラ一〇行目から一七丁オモテ一行目にかけてを、玉里文庫本は「思ほし」としており、他諸本の「思し」とは違う本文を採る。高松宮家本の「をも」と一見似ているが、これは助詞であるため、別物と判断する。

一七丁オモテ（画六六九左／大二七七～二七八）

1 ほしいてらるなやましきに①いたう
2 し〔ゐ〕られてわひにて侍かしこけれと
3 このをまへにこそはかけにも
4 かくさせ給はめとてつまとのみす
5 をひきゝたまへはあなわつらはし
6 よからぬ人こそやむことなきゆかり
7 はかこち侍なれといふ②人ありけしき
8 ともをみたまへはいとをも〳〵し
9 うはあらねとをしなへ③たるわか
10 人ともには④あるましあてにをか

① 河
② 河尾平大
［参考］定別「けしきをみ給ふに」

河宮「人あるけしきともをみ給へはいと」
③ 河宮　［参考］定河尾平別「をしなへての」河大「をしなへて」
④ 河

一七丁ウラ（画六七〇右／大二七八）
1 しきけはひ①ともしるしそら
2 たきもの②けふたきまてくゆりいて
3 きぬのをとなひ③さはやかにふるまひ
4 なして④をくまりこゝろにくきけし
5 きはたちをくれて⑤いまめかし
6 ことをのみこのみたまふわたり
7 にてやむことなき御かた〳〵⑥のもの
8 みたまふとてこのとくちはしめ⑦たま
9 へりけるなるへしさしも⑧あらて
10 ありぬへきことなれとさすかに⑨おか

① 河
② 河
③ 河　［参考］定別「いとはなやかに」
④ 河　［参考］定別「心にくゝをくまりたるけはひはたちをくれ」
⑤ 河　［参考］定別「いまめかしき事をこのみたる」
⑥ 河尾平大　［参考］その他諸本ナシ
⑦ 河
⑧ 河
⑨ ナシ　［参考］諸本「おかしう」

一八丁オモテ（画六七〇左／大二七八）
1 しく①おほされていつれならむと
2 むねうちつふれ②たまふあふきを
3 とられて③からいめをみるとうち
4 をとけたるこゑにいひなして④より
5 ゐたまへれはあやしくもさまかへ
6 たるこまうとかなと⑥いふ⑦心えぬ
7 人なるへしいらへはせてたゝとき
8 〳〵うちなけくけはひ⑧なるかた
9 によりかゝりてき帳こしにてを
10 とらへ⑩たまへり

① ナシ　［参考］諸本「おもほされて」
② 河
③ ナシ　［参考］諸本「からきめ」
④ ナシ　［参考］諸本「おほとけたる」
⑤ ナシ　［参考］定別「よりゐたまへり」河「よりふし給へれは」
⑥ 河
⑦ ナシ　［参考］定別「いらふるは」河「いふは」
⑧ 河
⑨ 河
⑩ ナシ　［参考］定別「て」河「給ひて」

一八丁ウラ（画六七一右／大二七八）
1 あつさゆみいるさの山にまと
2 ふかなほのみし月のかけやみゆ
3 るとなにゆへかとをしあてにのた
4 まふ①にえしのはぬなるへし
5 こゝろいるかたならませはゆみ
6 はりの月なきそらに②まとはまし

一六

7　やはといふ声たゝそれなり③うれ
8　しきものから

①　河
②　河宮別
［参考］定横陽池長肖三河尾平大「まよはましやは」定大「まよは〈ま〉しやは」
③　河

「花宴」帖の特徴

当該帖には、第一折の第五丁と対になる丁と第三折の第一六丁と対になる丁が切り取られていた。これらの切り取られた丁は前遊紙と後遊紙に該当するため、内容の欠損はないと推測できてはいた。実際に全丁を翻刻した結果、やはり当該帖には欠損はなかった。また、当該帖は徳光論において以下のように指摘される。

> 花宴巻においては、青表紙本系と河内本系との間にはかなり激しい相違がみられ、青表紙本系と別本との間には親近性がみいだされる。玉里文庫本は対抗本文例に示すように、尾州家本とほぼ一致し、また異同文節数の上からも尾州家本と最も近いことがわかるので、この巻は河内本系統である。独自異文節に顕著な特徴を有するものはない。[15]

たしかに尾州家本と最も近いことは確かだが、同じ河内本系の平瀬本、大島本との差もさほどない。あえて指摘すれば、河内本系ではあるものの高松宮家本との距離が多少あるといえよう。

なお、以下に、当該帖の特徴をまとめる。当該帖の独自本文には、定家本系・別本と河内本系を合わせたような本文が四か所ある。一丁ウラ七行目「と心つかひして」は、定家本系の「と」と河内本系の「は心つかひして」が合わさったような本文になっている。六丁ウラ三行目「きくにやすこしなくさみけむ」は、定家本系・別本に近い本文を持つ河内本系高松宮家本とその他の河内本系が合わさったような本文である。一四丁オモテ四～五行目「おほしさためたるをみたまふにも」は、定家本系・別本が「おほしさためたれは」河内本系が「さためたるをみたまふにも」となっていることからこれらの本文を合わせたような本文になっているといえる。一八丁オモテ四～五行目「よりゐたまへれは」は、定家本系・別本「よりゐたまへり」と河内本系「よりふし給へれは」を合わせたような本文である。

次に、内容に違いは出ないものの指摘すべき独自本文が五か所ある。一丁オモテの独自本文である「きさき春宮の女御の御つほねひたりみきにしてまうのほり給」は、先に指摘した通り、配置に疑問を持って「春宮の女御」としたと考えられる。三丁ウラの九～一〇行目にかけての「おもへるけしきなといといみしうやうのをりにたゝ」はいずれの本文とも一致しない。ただ、河内本系の尾州家本と大島本は「おもへるけしきなといといみし」で一度文章が切れていると考えられるため、当該帖の本文とは距離があると考えられる。四丁オモテの六～七行目にかけての「いかなれはとこゝろうくそおもほしかへされける」は、河内本系の高松宮家本に近いが、敬語表現での違いがある。八丁ウラ八行目「あへにかな」は音便の省略等の異同が諸本の間にあるものの、本帖の場合は音便やその省略では説明できない本文である。一五丁オモテ七～八行目にかけては、諸本にある「くちおしうものゝはえなしとおほして」の一文が抜けている。直前の「おはせねは」と「おほして」の見間違えによる脱文かと考えられる。ただし、「おはせねは」と「おほして」では見間違いが起きる可能性が低いことと、この一文がなくとも文意が通じることから、意図的な脱文の可能性も考えられよう。

さらに、解釈に多少の違いが出る独自本文が三か所ある。八丁ウラ九行目から九丁オモテ三行目にかけての「まきらはかし給なとをもひみたれた

まふさすかにたえてやみなむことはつらかるへくおもへりつるけしきなから」は河内本系に限りなく近い本文ではあるが、「まきらはかし給」の箇所に違いがある。この箇所は、源氏が朧月夜と逢った後に、彼女が右大臣家のどの娘かを推測している場面である。玉里文庫本では敬語表現となっていることから、この場面の語りが源氏の心内語から一度距離を取っていると分かる。一二丁オモテ一行目「もし」は諸本では「すこし」となっている。この箇所は源氏が若紫の許に帰った際に、男手一つで育てているがための不安を源氏が感じている場面である。諸本では若紫が「いささか人馴れした箇所が混じるのではないか」となるが、本帖では、「もし人馴れした箇所が混じってしまいはしまいか」と解釈できる。軽微な違いではあるものの、程度と仮定の違いがあるといえよう。一二丁オモテ八行目「したい給はす」は、定家本系・別本では、「したひ纏はさす」となっている箇所である。この箇所は、出かける源氏に対して若紫が後を追いかけないようになったと解釈できる箇所だが、当該帖は河内本系の「したひきこえ給はす」同様、若紫が源氏を慕わないという意味では一致している。

この他に、助詞・助動詞の違いが散見されるが、それらはいずれも内容に大きな違いは出ない。二丁オモテ四行目「東宮のさえかしこく」は河内本系とほぼ同じであるものの「も」と「の」という助詞の違いがある。六丁オモテ一行目の「は」、六丁ウラ六行目の「の」、七丁ウラ六行目の「に」は、いずれも他諸本にはない助詞である。八丁ウラ三行目では、諸本が「か」としている箇所が「は」になっている。八丁ウラ五行目には諸本にはない「と」を入れている。一〇丁オモテ五～六行目は河内本系高松宮家本とほぼ一致するが、高松宮家本にある助詞「に」が当該帖にはない。九丁ウラ一〇行目から一〇丁オモテ一行目にかけては諸本で「つる」となっている箇所が本帖では「ける」となっている。一四丁オモテ七行目は諸本では「に」となっているが「と」としている。

また、当該帖では音便化において諸本と異同がある。諸本がウ音便化している箇所を当該帖では音便化しないという特徴がある。四丁ウラ一行目「いたく」、五行目「あかく」、五丁オモテ一行目「わりなく」、五丁ウラ三行目「わかく」、六丁ウラ八行目「わかく」、八丁ウラ五行目「おかしく」、八行目「いとをしく」、九行目「わつらはしく」、九丁オモテ八行目「こよなく」、九行目「ありかたく」、九丁ウラ「なまめかしく」、一〇丁ウラ「こと〳〵しく」、一一丁オモテ六行目「なつかしく」、一一丁ウラ八行目「なく」、一三丁オモテ二行目「くはしく」、一四丁オモテ五行目「わりなく」、一二丁オモテ七行目「よく」、一五丁オモテ四行目「いまめかしく」、一六丁オモテ九行目「いたく」、一七丁一〇行目「おかしく」がそれにあたる。なお、九丁オモテ「かやうなる」はウ音便化の表記の有無の違いといえよう。一方で、諸本ではイ音便化していないにもかかわらず当該帖で音便化している箇所が一八丁オモテ三行目「からいめ」の一例のみある。いずれも、音便化の有無においての異同である。

以上のことから、当該帖の本文には、主に独自本文における定家本系・別本と河内本系の本文が合わさったような本文があること、脱文があること、基本的にウ音便化はしないもののイ音便化する箇所があるという特徴があるといえるのである。

【補記】

・本稿は、ＪＳＰＳ科研費21K00319の助成を受けたものである。

・本稿は、鹿児島国際大学附置地域総合研究所共同プロジェクト「鹿児島における観光資源の創出に関する理論的・実践的研究」（令和二～三年度）の研究助成を受けた研究「玉里文庫本『古筆源氏物語』の調査と旧島津氏玉里邸庭園」を基にしている。

・本稿は、二〇二〇年度前期武藤ゼミでの講義（基礎演習Ⅰ／演習Ⅱ）を基にしている。各丁の担当者は以下の通り。

一丁オモテ～二丁オモテ　武藤那賀子

二丁ウラ～三丁ウラ　白窪怜

四丁オモテ～五丁オモテ　岩元涼夏
五丁ウラ～一五丁オモテ　武藤那賀子
一五丁ウラ～一六丁ウラ　久保田千仁
一七丁オモテ～一八丁ウラ　末永颯汰

なお、異同の確認および考察は武藤那賀子が一人で行なった。

注

（1）鹿児島大学附属図書館の玉里文庫には、『源氏物語』が二セットある。本稿で扱うのは、一五帖のみのもので箱に「古筆源氏物語」とあるものである。

（2）徳光澄雄「鹿児島大学附属図書館蔵　玉里文庫本古筆源氏物語について」『語文研究』二三号、一九六七年四月

（3）「『源氏物語』原本データベース」（二〇一二年一月二五日一六時〇〇分閲覧）http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0091-027603&IMG_SIZE=&PROC_TYPE=null&SHOMEI=%E3%80%90%E6%B.A%90%E6%B0%8F%E7%89%A9%E8%AA%9E%E3%80%91&REQUEST_MARK=null&OWNER=null&BID=null&IMG_NO=1

（4）武藤那賀子「玉里文庫本古筆源氏物語（鹿児島大学附属図書館蔵）再考（一）」（『国際文化学部論集』第一九巻二号、二〇一八年一〇月）および「玉里文庫本古筆源氏物語（鹿児島大学付属図書館蔵）再考（二）」（『国際文化学部論集』第一九巻三号、二〇一八年一二月）。

（5）武藤那賀子「玉里文庫本『古筆源氏物語』「空蟬」巻を読む」（『国際文化学部論集』第二〇巻四号、二〇二〇年三月）

（6）徳光澄雄（前掲論文）

（7）伊牟田経久「玉里文庫本「源氏物語」（二種）の本文―「空蟬」「関屋」の両帖について―」『国語国文　薩摩路』第二〇号、一九七六年三月）

（8）新美哲彦「鎌倉時代における『源氏物語』の書写態度―空蟬巻における陽明文庫本と玉里文庫本を通して」『国文学研究』一五七巻、二〇〇九年三月

（9）武藤那賀子「玉里文庫本古筆源氏物語（鹿児島大学付属図書館蔵）再考（二）」（前掲論文）。

（10）池田亀鑑『源氏物語大成』中央公論社、一九八四年

（11）新日本文学大系『源氏物語』岩波書店、一九九三年

（12）池田亀鑑（前掲書）

（13）『源氏物語』における「春宮の女御」は全部で九例である。なお、ここで挙げる本文は新編日本古典文学全集のものである。

①「母后、「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、……」（桐壺①四二）……弘徽殿、春宮の母

②「春宮の女御、かくめでたきにつけても……」（紅葉賀①三一二）……弘徽殿、春宮の母

③「春宮の女御は、「あながちなり」と憎みきこえた……」（紅葉賀①三一四）……弘徽殿、春宮の母

④「中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらんも……」（花宴①三五五）……弘徽殿、春宮の母

⑤「この大将は、春宮の女御の御兄弟にぞおはしける。」（藤袴③三八二）承香殿、春宮の母

⑥「春宮の女御も、いとはなやかにもてなしたまひて……」（藤袴③三八二）……承香殿、春宮の母

⑦「春宮の女御は、御子たちあまた数そひたまひて、……」（若菜下④一六六）……明石女御、春宮の母

⑧「春宮の女御の御祈りに詣でたまはむとて、」（若菜下④一六八）……明石女御、春宮の母

⑨「春宮の女御の御ありさまのならびなく、……」（鈴虫④三九〇）……明石女御、春宮の母

（14）池田亀鑑『源氏物語大成』に掲載されていない本文については、「加藤洋介・校異集成（稿）」（http://www2.kansai-u.ac.jp/ok_matsu/index.html・二〇二二年一月二五日閲覧）を参照した。なお、凡例も同サイトのもの（http://www2.kansai-u.ac.jp/ok_matsu/hanrei.html）を使用する。

（15）徳光澄雄（前掲論文）